

平成26年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成26年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 トラフグ

学名 *Takifugu rubripes*

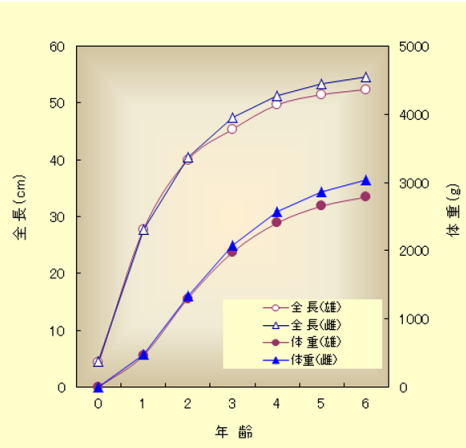
系群名 日本海・東シナ海・瀬戸内海系群

担当水研 瀬戸内海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 10歳
成熟開始年齢: 雄2歳、雌3歳
産卵期・産卵場: 春期(3～6月)、七尾湾、若狭湾、福岡湾、有明海、八代海、関門海峡周辺、布刈瀬戸、備讃瀬戸等
索餌期・索餌場: 周年、日本海、東シナ海、瀬戸内海、黄海
食性: 仔魚後期までは動物プランクトン、稚魚は底生性の小型甲殻類、未成年魚以降は魚類、エビ・カニ類
捕食者: 不明

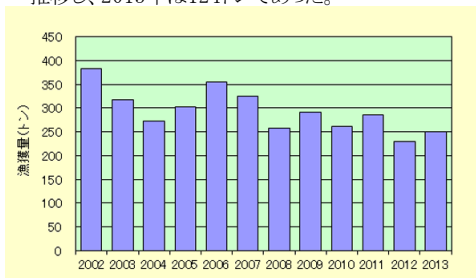


漁業の特徴

産卵場の七尾湾、若狭湾、福岡湾、有明海、八代海、関門海峡周辺、布刈瀬戸及び備讃瀬戸では、3～6月に2歳魚以上の親魚が定置網、釣り、敷網によって漁獲され、7～翌年1月にはそこで発生した0歳魚が定置網、小型底びき網、釣り、はえ縄によって漁獲される。日本海、東シナ海の沖合、豊後水道及び紀伊水道では、12～翌年3月に0歳魚以上がはえ縄によって漁獲される。

漁獲の動向

本系群の漁獲量は2002年(4～翌年3月)の383トンから減少傾向で、2013年は250トンであった。本系群の2002年より前の漁獲量データは存在しないため、この指標として、下関唐戸魚市場(株)における取扱量(4～翌年3月)を用いた。取扱量は1971～1993年に590～1,891トンで推移後、1994年から急減し、1997年以降109～336トンと低水準で推移し、2013年は124トンであった。



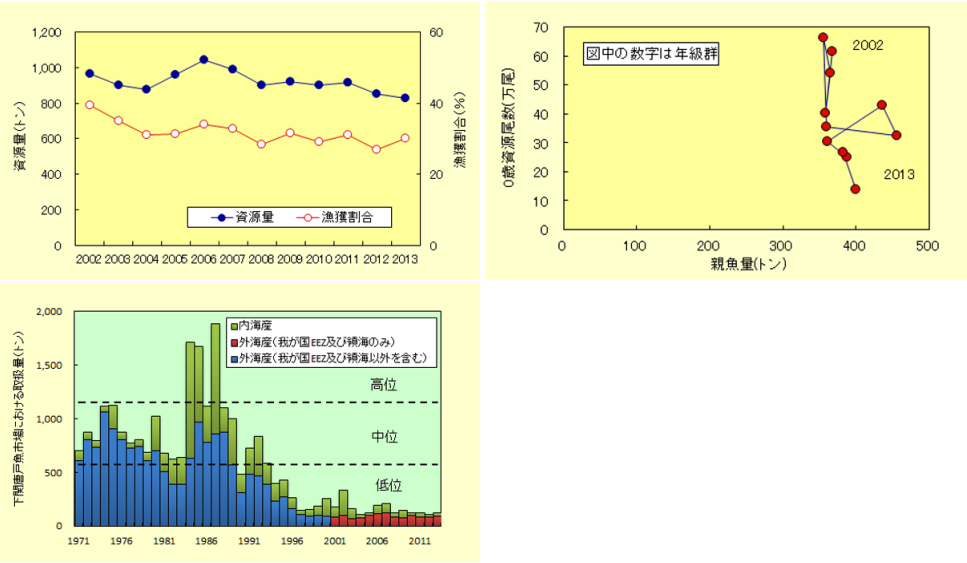
資源評価法

2002～2013年の資源量は、日本海、東シナ海および瀬戸内海における0～5歳と6歳以上の年齢別漁獲尾数を用い、自然死亡係数(M)を0.25と仮定して、コホート解析により推定した。年齢別漁獲尾数については、Age-length keyと全長階級値別雌雄比を用いて算出した。

資源状態

資源量は、2002年の968トンから2004年の878トンに減少した後、2006年の1,045トンに増加したが、その後は減少に転じ、2013年は829トンであった。水準は、長期の下関唐戸魚市場(株)の取扱量の推移から低位、動向は、資源量の推移から減少と判断された。将来予測から現状の漁獲および人工種苗の放流が継続された場合、資源量および親魚量は減少していくと推定された。明瞭な再生産関係は認められず、2006年以降再生産性効率は低下傾向である。現状の漁獲圧と加入量当たりの親魚量との関係から加入乱獲であることが示唆された。2013年の0歳魚に占める人工種苗の混入率は22%、添加効率は0.06と推定された。



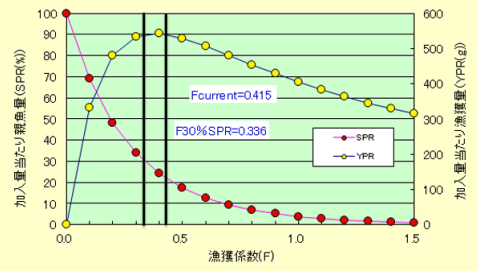


管理方策

資源水準は低位、動向は減少と判断され、近年、再生産性効率が低水準で推移していることから、現状の漁獲を継続した場合、資源量は減少すると予測された。2019年に2006年の1,045トン(資源量を推定した期間中で最大の資源量)に資源水準を回復させることを管理目標とし、ABC算定のための基本規則1-3)-(3)に基づいてABCを算定した。ABClimitは漁獲係数0.45Fcurrentとして推定した。ABCtargetの安全率 α は標準値0.8とした。

	2015年ABC	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	101トン	0.45Fcurrent	0.19	15%
ABCtarget	83トン	0.8・0.45Fcurrent	0.15	12%

- F値は全年齢の平均値、漁獲割合はABC／資源量



資源評価のまとめ

- 資源水準は低位、動向は減少
- 将来予測から現状の漁獲および人工種苗の放流が継続された場合、資源量および親魚量は減少していくと推定された
- 明瞭な再生産関係は認められず、2006年以降再生産性効率が低下傾向である
- 2013年の0歳魚に占める人工種苗の混入率は22%、添加効率は0.06と推定された

管理方策のまとめ

- 漁獲圧の緊急な削減と放流種苗を効率的に資源に添加することによって加入量を増やすことが求められる
- 未成魚、特に0歳魚の保護や再放流が重要
- 種苗放流だけで急速な資源回復は困難と予測されるため、資源管理との適切な組み合わせが必要
- 各産卵場及び育成場において漁獲実態や資源状況に応じた漁獲規制や保護を行うことが必要

執筆者: 片町太輔・石田 実

資源評価は毎年更新されます。